

仲川 利久氏（朝日放送株式会社 テレビ編成局番組企画部長、プロデューサー）

●日常性を学習の場に持ち込める放送メディア

—— 生涯学習とか生涯教育といったことと放送メディアのかかわりを大学という形でやっていこうということで、現在、関東の方では卒業生を出すまでになっていますが、全国化を目指途中で、次の段階として関西地区が調査の対象になってきています。そこで、いろいろとお話をお聞かせいただきたいということでお伺いしたのですが。

仲川 日本人というのは、勉強するというのが資格を取るということであるという一面がありますね。資格が取れて、実用的に自分がある職業を持って生きていくときに非常に役立つという面があるからね。もう一方では、そうではない、ひとりの人間の生き方というか、そういうものを勉強をするという。私は、どちらかと言えば後者の方です。いかに自分の人生を有意義に過ごすか、生きるかということ、そういった面がもっともっと具体的に出てくるような、そういった講座というものが必要なのではないかと思います。私もいろんなところへ講演に行きますが、私がテレビメディアの中で、特にドラマ作りを長年やってきた体験から、そういった裏話を期待されるんですね。多分そうだろうと思って私も演壇に立つんですが、どうしても、もう一つの自分が「いや、これだけ大勢の人たちが、この講演を聞くためにこれだけの時間を費やして来ているんだから、何かもっと良いことを言わなきゃいかん、学問的なことも言わなきゃいけないのかな」と。そういうような形で前もって勉強してきたりしてやっても、これがはっきり言って、自分の身についていないものだから、どうも話している中で迫力がないことに気づくんですね。何か知らないけど人間というのは、そういうふうな形で、つい、外出着、よそ着をしちゃうということがあります。だから放送でも大学と頭につくと、学問をやらせなきゃとか、やらなければというようなお仕着せのものが感じられるわけです。そうでないといけないのか…。もっと平易な道徳や倫理というようなものを含めて、ごくあたりまえのことが、メディアを使って、ふっと言われたときには、それが「あっ、そうか」というふうに改めて感じ取れるということもあるだろうと思います。

今日、学校で19歳になる女生徒が「一歳下の弟が急に反抗的になって、母と毎日のようにけんかをしているんです。先生どうしたらいいのか相談にのって下さい」って言うからね、「お互い競争しているんでしょう。そこに問題があるんだ」と、お母さんに言ってあげなさいと言ったんです。昨日まであんなに良い子だったのが、急に変わったというのは何か理由があるんだから、「どうしたの」っていう一言を言ってあげなさいと。そうすると、ハッとするはずです。「なによ、あんた、親に反抗するの」なんてことを言うから、「なに言ってんだよ、親面すんなよ」とかっていうふうになって、五分と五分の闘いになる。そうじゃなくて、「どうしたの」っていうことを聞いたときに、ふっと違う姿が見えてくる。

私は、英会話なんかも含めて、教育ということばを使うのは嫌いなんです。たとえば、番組でもやろうかと思うんですけども、「ホテルにて」とか「ショッピングの」とか、何かそう

というようなところで、ある状況設定をして実際動いている姿の中でまさに自分がそれに接しているような形、そういった映像を中心とした勉強の仕方もあるし、何か方法があるのではないかなと常々考えてきてるんです。ですから、私は自分に対する生涯教育というのは持っているつもりです。人間ってというのは、ある部分で何かが必要になると、それに対して勉強していきます。たとえば、私が戦国時代の番組を作ろうとしますと、私は徹底的に戦国時代のことを勉強しますね。こんなふうにして、私は今までにたいへんな学習をしてきたわけです。だから、今何が必要なのかを考えることが必要なのかもしれません。

●「見て損しなかった」という感覚が大切

仲川 講演で、最近教育関係が多いんですね。「なんで、私が教育」と疑問に思って聞いてみると、私がドラマ作りをしていたからです。ドラマってというのは人間を描いているものですから、人間とは何かを徹底的に研究していきます。ある意味においては心理学者に近いぐらいの人間の考察をしていくわけです。そういう意味で人間ウォッチングをやってきて、番組を作ったり、ドラマを作っていく中で、多少なりとも人間をいろんな角度から見る目を自分自身の中に養ってきたんでしょうか。教育者は私の話の中から、人間の本性とは何なんだということを知ろうということらしいです。人前で何かを表現する者は「楽しくて、明るくて、ためになる」という要素を大切にしなければならないことも大事なことです。テレビの番組を作るのに、われわれが口を揃えて言うのは、「楽しくて、明るくて」そして見終わった後に「ああ、見て損をしなかった」というのが良いんだ、と。この「見て損をしなかった」というのが要するに今、私が大事にしている部分なのです。それを「これがあんたたちにとって大事なことだぞ」と、「ためになるんだぞ」と、押しつけてきたら、人間というのは拒否をしていくという、そういうものがあるので、拒否反応を少なくするためにも、楽しい、おもしろい、という要素が必要になってくるのです。

テレビ界の私が講演に呼ばれているというのは、要するに、どんな職業の人たちのところへ行っても、役者、タレント、キャスター、そういったものがわたしの口からどんどん飛び出してくると、そういう部分でより近い関係にあるということになるんですね。まずそういう基本的な背景、状況の中で、少々説教じみた教育的なことを言っても、ある程度我慢をして聞いてくれる。そういうものなんですね。ですから、長い間テレビ番組を作っていて、視聴率が高いというのは何かということね、基本は「なじみ」なんです。番組と見ている人の間に生じる「なじみ」であり、番組の中に出ている役者と自分との「なじみ」、つまり近い関係と言った方が良いかもしれませんが、そういうところがあって、成立しているという部分がありますね。だから、なにもそこまで受講者とか視聴者にヨイショしなくてもいいじゃないかと思われるかもしれませんが、堅い文字で、たとえばタイトル一つとっても「大学市民講座」といったとたんに、「ウァー、かなわん」という人もいるということですね。そのことを作り手は考えておかなくてはいかん。だからといってマンガチックにやれという意味ではなくて、そこまで壊さなくたって、口当たりの良い表現の仕方があるじゃないかと。その辺の努力をしてもいいんじゃないかと思うわけです。

先程もわたしはクリエイターを志している子たちのところで授業をしてたんですが、ここでも出席簿を開けて名前を呼びながら、その子たちの特徴をつかまえてダジャレとか言ったりするとね、皆がゲラゲラ笑って「先生、それは5円ぐらいしか値打ちありませんね」とか、なんとかかんとか言いながら、それで出席もとって終わって「さてと、君たちにここで言うておかなきゃならないことがある。説教から始めるぞ」って言うのと、何かこう「はい」っていうようなね、すなおな気持ちになって聞きます。だから、それを具体的にどうしたら良いのか、あるいは、それができる人、できない人、いろいろあると思いますけど。まず、大学へ行けば、横にいる友達も前にいる先生も生身の人間ですが、映像を通して、テレビというメディアの中で行く場合には、どうしたって、前にいる人っていうのは「おい」と言って声をかけて返事が返ってくる関係ではありません。私たちが三十何年間、本当にのたうって、見えないお客様の心の中をどんなふうを探ろうかっていうふうにして今日まで来て、それで今なお探れない状態にあります。しかし、番組と視聴者により親しい関係が持てるような方法を大切にすれば、中身がよく似た番組であっても、ちょっとその辺を工夫するだけで大きく変わるんだという、この実感だけは受けとめてきています。作り手の立場としてはそういったことがあるんではなかろうかなということです。

●まじめに勉強できる深夜の時間帯

仲川 もう一つ大事なことは、放送というのは時間帯が非常に重要なんです。何時にどんな番組を放送しているかということです。週末の金曜日、深夜1時以降の番組を、私は去年の10月から始めました。開始したときに、たいへんまちがったことをしていたんです。これはご参考になるかと思います。私は深夜番組の視聴率を上げるためには退屈させないような、おもしろいものでなきゃいかんと思ったんです。ロックやお笑いものなどやりました。でも、視聴率はいっこうに上がりません。なぜなのかなと考え、ふっと気がついたんです。まず、夜中の1時、2時っていうのは、普通の人は寝ている時間ですよ。じゃあ起きている人っていうのは何のために起きているんでしょうかと。起きていなきゃならない人、つまり仕事を持った人ですね。これがまず一つありますね。あとは明日の朝何もスケジュールがなくて、ただ漫然とという人、これは特に若者に多いですね。あとの人は明日のために寝てるんですよ。それで良いんです。寝てる方が正常なんです。だから、少数の起きている人に向けてロック音楽やお笑い番組を放送してもほとんど意味がなかったということです。

しかし、時代の流れは、1日24時間の生活感覚を変えてきています。放送も当然そっちの方への対応もあるでしょう。ますます深夜族が増えていくという状況の中でも、当然需要があるだろうし。しかし仮におもしろい番組を放送しても、夜中まで起きていておもしろいものに接しようなんていう人はいないということがわかったんです。深夜だからこそ、まじめに一つのことを深く掘り下げて。見てくれる人の数が少なくても良い、まじめに、真剣に討論したり、今を、人をまじめに語るということをやってみました。成功しましたね。視聴者にとって、起きていて、見ていて損をしなかった番組なんです。起きていた人がたまたま見ていて、そのことを友だちに話した。「おい、おまえ、あの番組見てるか。いろんなことが勉強になるぜ。」「勉

強になる」ということばを視聴者が使ってくれる。それと、深夜の商売をなさってるかたが、この種の番組を見ることによって自分の中に情報や知識を貯えていく。お客さんに対して、たとえば野球の話題が出てきたときに野球の話が、経済の話が出てきても。今の板前さんとか料理屋のご主人は話し上手ですよ、どんな職業のサラリーマンとでも対で。

人々は、豊富な話題は自分にとって必要だし、自分の仕事としても必要だということがわかり、深夜というのははじめに勉強する時間であってもいいということがわかったのです。1日24時間の中で、何時に放送するのかということを、こういう内容のものだから、だれに見てもらいたいから何時に、という考え方があるのではなからうかと思います。この放送時間帯を決めるというのは非常にむずかしいかもしれませんが、この辺を何かお考えになった方が良いかと思います。

これは、メディアは違いますが、日本の商業演劇が観客動員で非常にむずかしい状況にきております。あたりまえです。午前11時半から、第二回目が午後4時から、この時間、普通のサラリーマン、OLを含めて、働いている人がどうして見に行けますか。行ける人は職業のない人、おばちゃんとかおばあさんとかが、お弁当付きでなんとか時間潰しをしていると言っても良いでしょう。真に芸術に接するとか、演劇を見て心から楽しむというようなものではないわけですね。この人たちも年々、年をとって、やがて出て来なくなってきますね。従来の上演時間を続けていくと、今に演劇層は減っていくと思います。現代は多くの奥さんたちも働きに出ており、やっと時間がとれるのはせいぜい土、日ぐらいです。そうなってくると、どうすれば良いのか。まずは上演時間を変えなきゃいかん。サラリーマン、OLがちゃんと見られる7時とか8時という時間にね。いずれそういうときが来るんだから、その前に手を打つ必要があるんです。常に流動する生活感覚の中での時間帯をちゃんと睨んだ上で、ものを見る、見せるというようなものを考えていくといいのではないのでしょうか…。

●共通する番組作りの基本的発想法

仲川 これはあくまでもテレビメディアの中に勤めている人間の編成的、制作的立場からものを言っているのです、そちらの質問とは合っていないかもしれません。ただ、教育とか勉強とか、そういうことになりますと、私が今、何をしなければならないのかということと、多少関係があります。特に若者の教育ということについては無関心ではられません。実はこの前、フォーラムのパネラーに呼ばれました。テーマが「若者に期待するもの」ということでした。大勢の若者たちとPTAの人たちを相手に、私は冒頭のあいさつで「私は若者に期待するものはない」と逆説的に言ったんです。というのは、こうして欲しいからという私の願いに対して、そのようにあなたがたがする必要はないんだと。そうじゃなくて、あなたが自分の人生をどう有意義に生きるかということを考えて下さい。年いった人間が気に入るために、若者にこうなれなんていうことがまちがっているんだと。

最近、番組を作っている若いスタッフを見ていて気になることがあります。一番簡単で大切な基本というものを考えていないのです。仮に新番組の企画会議があって関係者が集まったとします。若いものは「何か視聴率の上がるおもしろいものないだろうか」といきなり中味に入る。

だから、私は「ちがう」と。なぜ、前の番組を止めたのかということをもまず考え、次に、何をするのがベターかということを考えることが大事なんだと。つまりコンセプトですね。楽しくする、おもしろくするというのは、テクニックだよ、後からプラスアルファしていく要素だよと言いたいのです。近頃、内容の説明はなんとかできるが、企画意図を語れない者が多いのは問題ではないでしょうか。私たちが昔やっていた一番簡単なことをやろうじゃないかと。ですから、私は講演に行っても、常に「なぜ」という、「なぜそうなったの」「なぜそんなことを言ったの」「なぜ泣いたの」とかいう、そういうことを、皆さんの前でお話をします。あたりまえのことなんですけど、本当に皆さんがふっと見過ごしているということなんです。

私は、放送大学がどうあってほしいというようなおこがましいことは云えませんが、もし教養講座なんかが設けられるならば、こんなことはわかってるでしょうが、と関係者が思うようなことを、もう一度やってもらいたいと思います。つまり、花を見て美しいと思える心、あるいは本当にすなおに人間の感情が、物に、人間に対して向けていける、そのことが大事であるということをもっと芸術面も含めまして、根本的に、決定的に、対人間とは何ぞやという部分の、各ジャンルの要素をいろんな表現形式でやってもらいたいですね。

●放送大学は人の触れ合いを取り戻せるか

第2次世界大戦の時、ポーランドのアウシュビッツに収容され、地獄の体験を持つキティさんという婦人が今、英国のロンドンからちょっとはずれた田舎町でレントゲン技師をなさっているんですよ。そのキティさんをもう一度アウシュビッツに連れて行って、戦争というものは、いかに人間にとって不幸で悲惨なものであるかということをテーマにした番組をBBC放送が企画したのです。BBC放送はある見識を持ったプロデューサーに、この番組の担当を依頼してきたのです。すると、そのプロデューサーが「いや、そういうことはやるべきでない。その人をもう一度あの地獄の世界に引きずり込むなんて、とんでもない考えです。私は、その人に会って、やめさせる。それでもいいのか」と言ったのです。そこでBBC放送は「いいです。これは、あなたしかできない。あなたにすべてを任せます」といった。早速彼は彼女に会いに行くと、キティさんはちょうどレントゲンをやってまして、受けていたのは60歳ぐらいの男の人で、戦争体験のある人でした。キティさんの冗談で男の人が笑って、白い歯が見えたんです。すると、キティさんが「あなたの歯は本物ですか」と聞いたんです。「はい」と彼が答えたら、「良かったですね」とキティさん。笑いながらたんとと会話を交わしているキティさんは、あの恐ろしいナチスが、収容所に入ってきた人の金歯を引き抜いたり、髪の毛を刈ったりしたことを思い出していたのでしょう。だから自分の歯があるということは収容所へ行ってなかった幸福な人であろうということなんです。プロデューサーは「あなた、やめなさい」と彼女に言ったんです。キティさんは「やめない」と。「戦後40年経つと戦争そのものは風化する。だから私自身が今の若い人たちに向けてメッセージを送っていかなければ」ということが一つ。もう一つは「今私が生きていられるのは死んでくれた人がいたからです。私は現地へ行ってその人たちに謝るんだ」と言ったのです。説得にやってきた筈のプロデューサーが逆にキティさんの熱意に動かされることになったのです。アウシュビッツでのキティさんは「戦争はいけな

い」とは一言も言わないんです。「人間とはこわいものだ」と言っているだけです。人間には悪心も良心もいろんなものが一つの肉体の中にあるんだ。それが何かに触れることによって、あるいは何かの環境によって悪の部分が出てきたり善の部分が出てくるんであって、戦争を起こしたのも人間ならば、ナチスドイツのこの人たちだって戦争がなくなれば良いお父さんであるだろう。それが人間なんだ。だから人間とは何かを考えるべきなのだと。こういう複雑な社会になればなるほど、都会化が進めば進むほど、その考えが薄まってゆくから、私たちが今学ぶべき大切なもの、もう一度せめて人間性だけでも引きずってこなければいけないんじゃないだろうか、というようなことを私はそのプロデューサーから聞いたんです。情報化の時代を迎え、家に居て、仕事して、ワープロで書類を作って、ファックスで送ってという、日常の便利さを喜んでいますけれど、他人との関わり方が下手になっています。デパートとや医院には人と人との交流があります。お医者さんは脈を取ってくれますね。裸になって、裸になってというのはうまく言ってますよ。聴診器をあててくれるんです。ここに人間の暖かい触れ合いが生まれます。デパートへ行けば、「何にしましょうか」って手から手へと品物を手渡してくれるんです。そういう生の人間関係が今後減る一方にあるから、その空間をより膨らませるという形で、人間の触れ合いをどのように新しい形で活かすかというのを、今、放送大学を通して何かそういうものをやっていただけないでしょうか。

●放送大学を地域発信基地に

—— 関西で放送大学をつくる場合に、地域特性との関連で、講座や内容なども含めてどういう課題があるとお考えでしょうか。

仲川 それは私たちにも課せられた課題なんです。実は11月26日に沖縄で民放大会がありまして、それに出てたんですが、民放150社、800人余りが集まった大会だったんです。そこでシンポジウムが行われました。そのテーマが「地域社会の活性化と放送局の役割」というものだったんです。田原さんの司会で、大分県知事とか大前研一さんなどが出ておられたんですが、とにかく一極集中、東京と地方局という関連でもう物事を考えてはいけないということですね。ただ単に放送ということではなくて、経済、文化そういった面も地域ごとといいましょうか。その前提として大前さんが言われたんですが、「これからは国境が薄くなる、こういう方向へ向かうんだ」と。やがて香港が中国に返還されますが、それを非常に危ぶんでいる人たちがいることを知ったカナダ、トロント市が「うちで国籍を与えてあげる。中国国籍も持っていてもよろしい。仮に政情不安になっても、こっちに来られるから安心でしょ」という、二つの国籍を持てるという話なんです。こういうふうには、これからは地域対地域という結び付きが強くなるだろう。もう国対国というレベルだけで物事が進まなくなる、ということを言っているんです。そんな話を聞いた何日か後にベルリンの壁にドンと穴が開いちゃって、アレヨアレヨという間に…。今日の新聞によればチェコの国境のゲートが外されるなんていうようなことも、まさしく国境というものがなくなってくるということが目前で起こっています。まあ、それは一つの前提として置いておきまして、今、我々が地域というものをどう考えていくかというこ

とですね。ただ単に、東京を相手に地域がどうのこうのと言ってもしょうがない。つまり地域の持っている特性が発信基地にならなきゃいかんし、また、新しい文化を創造しアピールすることが大事だ。それを電波メディアが側面から応援していった町の活性化につないでいくという。さて、放送大学の地域性ということを考えますと、つまり、学問の概論、概念には地域性なんていうのは全くないわけです。そこで考えなければいけないことは、やがてCATVが芦屋、尼崎をはじめいろんな所で誕生してきますね。それは、地上波の番組との違いや特徴はなんだろうか。いつでも宇宙衛星を使った地球規模のニュースが飛び込んでくるとということと、地域社会の出来事を細かく取り上げたもの。このようになると、もうこれ以上、電波が入り込む余地はないのではないだろうか…。この上、さらに放送大学が電波競争の中に参加することはないと思います。放送大学はあくまで独自の内容を発信すべきであるし、一方通行の発信から受信するためのコミュニケーション空間を設けることはいかがでしょう。

●「開発」は放送大学の役割ではない

仲川 我々のメディアで今、第二のニュース戦争というものが始まっていますね。ニュースステーションが勢いを得てますけど。あれを見ていてもわかるように、あれだけワイドにニュース番組を広げていってもネタがあるんです。我々の世の中にはあんな悪いことばかりしかないんでしょうか。これでは子供たちが未来社会に希望が持てなくなると思いますね。もっと良いニュースもたくさんあるのです。それを我々は「ひまネタ」と言うんです。ひまネタが入ってこないんですね。たとえば、丹念にバラ作りに生涯をかけている素晴らしい人もいます。学問的ではないかもしれませんが、なにかそういった部分で放送大学と結びついてくるものがあるのかなと思うんですね。ただ、私が言っている人間の基本とかっていうことになると普遍的なものですから…。地域性っていうとどうしてもその地域の産業・文化というものでしかありえないと思います。ある番組で、地域の意識調査をしました。関西という地域に対して東京の人はいい印象を持たないんです。ただ、文化に対しては点数が高かったんです。それは京都という場所が入っていたからなんです。京都への憧れ、京都への関心が強かったんです。しかし、これを我々がいくら掘り起こしたって、我々が住んでいて、我々の知っている所なんですね。これは他県の人たちにとって重要なものなんですね。じゃあ何が残されているのかっていうと、要するに開発とかいろんなことに対する宣伝しなくなっちゃうんです。「このように変わりますよ」「地域がこのようになります」という。これは放送大学のやるべきことではないわけです。ただ私は、生涯教育というくくりの中で、もう一度文化と歴史というものを地域の一つの財産として発表していくというか、講座を開いていくということが残っていると思います。

それともう一つ、新しい文化に向けてがんばっている若者であったり、いろんな人たちを取り上げてあげることが、地域にとって電波が果たしうる最大のものであろうと思います。その人たちがそれによって勇気づけられていくと、つまり、やったことに対しての評価が出てくると、「よし、もっとがんばろうじゃないか」ということになるんです。今、我々の放送ではたいへん申し訳ありませんが、地域の人たちがどんな立派なことをなさっても「そんなもの

視聴率上がるかな」、これなんです。ここにね、少年隊が出てくればなんでも良いんです。それだったらやろうかなというふうな。だから私は、そうではないところで何かしていただけるものがあるんじゃないだろうかと思うんです。ボランティア、文化活動、そして地域のいろいろな生活をしている人たちがそれぞれにあるだろう。もう一度地域というものを、お互いの周辺を見渡してみるという、その辺のことですね。

私自身は今、演劇を通した地域文化の向上ということを、個人的な活動の対象にしています。まじめにテーマを追求しております。その中に甘みを加えることも大事なんです。甘みを入れるために、まじめを抜いてしまったらダメです。まじめという前提があって、それを加工しないでほったらかしておくとか食ってくれないから、ちょっと甘みを入れるっていう、それぐらいはしてもいいんじゃないのっていうね。そんなにガチガチの、そうでないと教育ではないとか、大学ではないとかいうようなとらえ方はどうかと思う。だから文珍さんがなぜ関西大学に呼ばれたかっていうことも多分に意味があると思います。たとえば授業の内容が、100%のものを固く難しくやったために15か20しか理解が得られなかった。それを多少加工することによって、100%のものが、ひょっとしたら70の価値に下がるかもしれない。でも、20より70の方がいいんじゃないかなと思います。私は番組作りもそうしてるんです。私は絶対に視聴率先行では考えない主義です。コンセプトを決めた後、視聴率を上げるためのPRとかキャスティングなどを考えます。その前には絶対にだれに対しても「なんでこんな番組作るの」って言われたときに、きちっと論理的に説明できるような基本を大切にしています。私の番組作りの基本コンセプトは人間ウォッチングです。特に私は開発センターの加藤先生を尊敬しています、あのかたの人間観を。あの先生の著作集を読み切ってごらん、と今の若い人たちに言ってるんですが、なかなか読まない。学校で私はそれを教材にして授業の冒頭、約30分間をそれにあてます。そうすると生徒も聞いてくれる。だから、そういうことだと思うんですよ。本がそのまま並んでいても読んでくれない。ただ、一つ皆さんが見ているものがあります。「健康講座」です。これはおのれに直接関係がありますから、おのれ自身の問題です。だから、ほかのジャンルも「おのれ自身の問題ですよ」というふうに向けていけば、放送大学も、より一般の人たちに近いものになるだろうと。ただ大学があって、通信教育があって、そして放送大学があってという一つの並びの中で、「資格を渡しますよ」というだけでは、なかなか広がらないし、せっかく大量に電波を使って多くの人たちにメッセージできるものが、ごく少数の人だけのものに終わってしまいそうな気がします。

—— その辺が先程おっしゃった触れ合い的な部分ということで、知識を渡すのはメディアを使えばかなりできると思いますが、番組作りなり、カリキュラムなり、そういう面での触れ合いの要素が重要になってくるんでしょうね。

仲川 そうなんです。そこのところがどうすればということになるんです。送りっぱなしだったらだれにだってできます。我々だってなんのケアもなく作って送りっぱなしで「さあ、どうか」というんだったら、良い番組を作るのは簡単なんです。すばらしい原作をもってきて、日本の第一級のシナリオライターに書かせて、一級の監督を連れてきて、そして有名な俳優をキャ

スティングしたら、ほっといたって良いものができるんです。たとえば藤村の「夜明け前」。昔、ある劇団がやったんです、有名な役者さんで。良質の作品でした。あれを悪いと言う人はだれもいません。しかし今それを見たいという人はいません。それと大学とは違うと言われたらそうですが、せっかく作るものだったら、より広がってくれることを願いたいということですね。わたしの希望はそういうことです。